特集 伊吹山の自然再生

山を巡る人々の物語

問 市 環境保全課（伊吹庁舎）　☎58-2230　FAX58-1630

「お花畑はどこ？」

伊吹山の山頂のお花畑は、国の天然記念物に指定され、薬草や亜高山植物の宝庫として有名です。滋賀県に植生する植物約2300種類のうち、伊吹山に生育する植物は約1300種類にもおよびます。

しかし、多くの花が見頃を迎えるはずの初夏の伊吹山で、登山を楽しむ多くの人から聞こえるのは「花が見当たらない」という声でした。

あの頃の自然を取り戻す

市内のどこからでも見える伊吹山ですが、麓からでは見ることができない変化が起こっています。

そこで、伊吹山の花や生き物、そして故郷を愛する人たちがかつての自然を取り戻そうと日々、奮闘しています。

米原が誇る霊峰 伊吹山をこの機会に見つめ直してみませんか。

1_植生保護のため山頂一帯を囲む防護柵(西登山道)　2_1合目の案内板　3_大雨により崩れた登山道　4_冬期の豪雪に備え、ネットを下げた植生防護柵　5_シカ等による獣害で植物が食べ尽くされ、むき出しになった山の地肌　6_自然再生を目指す案内板

だから、次世代に受け継ぎたい。

ユウスゲと貴重植物を守り育てる会

会長
髙橋（たかはし） 滝治郎（たきじろう）さん

けなげに咲く花たちを見てほしい

5月31日、小雨の中、3合目には防護柵がシカに破られていないか、目を凝らす人の姿。柵の内には、雑草を除去する人の姿がありました。ユウスゲと貴重植物を守り育てる会のメンバー6人です。

結成11年になるこの会は、名前のとおりユウスゲをはじめ、伊吹山の3合目に自生する数多くの貴重植物を守るため、活動しています。

その内容は、植物の保全だけにとどまりません。登山シーズンの春から秋にかけては、月に1回程度、観察会を開いています。保全活動により再び咲くようになった花々を多くの人に知ってもらうためです。

会の会長を務める髙橋滝治郎さんは、伊吹山の麓で生まれ育ちました。いつもすぐ近くに見える伊吹山は、まさに心落ち着く故郷の山だといいます。

「だんだん荒れ果てていく姿を見るのはつらいものです。山を守りたいという同じ思いを抱く仲間とともに、少しでも再生していきたい。そして、地域の子どもたちには伊吹山の魅力と自然の大切さに気付いてほしいと思います」と髙橋さんは話します。

1_5月~6月、3合目の柵の中で見頃を迎えるアヤメのそばでは除草作業が行われた
2_シカに噛みちぎられた柵の補修作業
3_夏に見頃を迎えるユウスゲの観察会

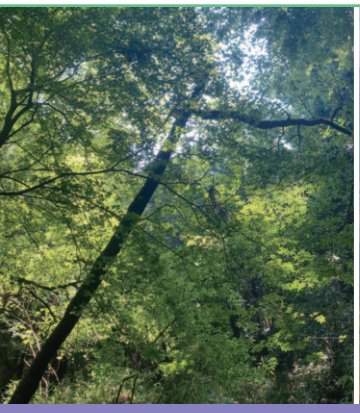
その一歩が安全であるために

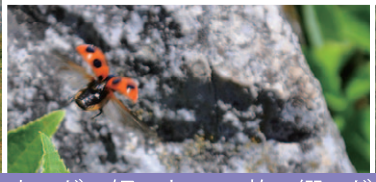
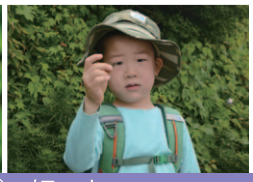
また、別の日には、会の有志メンバーが、伊吹山6合目の県道 表登山道を修繕しました。

登山道は、大雨により大量に押し流された土や石で道筋がえぐれ、ひどく傷ついていました。

登山客が安心して登れる山であるために、暑い日差しが照りつける中、修理道具を手に黙々と作業を行います。メンバーの後ろ姿からは、故郷の山への熱い思いがにじんでいました。

1_遭難防止のため、登山道の指導標を設置
2_木の枠に石を敷き詰め、足の踏み場をつくる
3_大雨で荒れた登山道を土嚢で修復



守りたい理由は、花が好き、山が好き、故郷が好き。

伊吹山もりびとの会

花の宝庫　伊吹山　あの頃のお花畑を再生したい

代表
西澤（にしざわ） 一弘（かずひろ）さん

理事
犬飼（いぬかい） 義隆（よしはる）さん

「これはイブキフウロ、あっちにはルリトラノオが咲いてるね」

6月7日、西登山道に咲く花を楽しみながら山頂を目指すのは伊吹山もりびとの会のメンバーおよそ20人。この日は、会の一大イベントの一つ「西洋タンポポ除去作業」の初日です。

西洋タンポポ等の外来種の増加は、伊吹山固有の草花の生育を妨げ、絶滅の危機を招くことになりかねません。今回除去した西洋タンポポは21・2キログラム（ポリ袋4つ分）で、去年同時期のおよそ7割も減少しました。

「伊吹山にしか咲かない花たちが、きれいに咲く手助けをしたい―」一つ一つの花に目を凝らして、粘り強く続けてきた活動は、確かな成果につながっているようです。

8月上旬、西登山道の植物防護柵の中では、伊吹山の夏を代表する花、シモツケソウが咲き揃います。

「10年、20年前は一面にお花畑が広がっていたんですが、今は獣害等でずいぶん減ってしまって。でも、今年も保護柵の中ではきれいに咲いてくれました」と、登山客に話しかけるメンバーのみなさん。山頂での植物ガイドや観察会は活動歴32年になるこの会の原点ともいえる活動です。

「自然再生は簡単なことじゃない。でも、大勢の人に、たくさんの花を楽しんでもらいたいんです」。伊吹山を愛するメンバーの熱い気持ちです。

1_登山客へのガイド
2_遊歩道の踏み込み防止ロープの設置
3_外来種西洋タンポポの除去作業
4_保護している固有種タンポポ(蔓が反っていないのが特徴)

伊吹山ネイチャーネットワーク

本物の自然の姿を、見て、触れて、感じてほしい

事務局長
山下（やました） 吉和（よしかず）さん

「見て！バッタ、見つけたよ」

一年の中でも夏は、数多くの植物や生物が観察できる季節です。8月1日、伊吹山ネイチャーネットワークによる親子自然観察会が開かれ、山頂には、子どもたちの楽しそうな声が響きました。

平成20年に結成されたこのグループは伊吹山の生物や植生などのモニタリング調査を行うほか、自然環境の大切さを子どもたちに伝える活動を行っています。

「子どもたちには植物や虫だけでなく、雲の動きや石灰岩でできた自然の造形物なども含め、ここでしか体験できない〝本物の自然との出会い〟をしてほしい」とグループ事務局長の山下吉和さん。

次代を担う子どもたちと自然への愛情が伝わります。

伊吹山を守る自然再生協議会

山を巡る人々の連携

伊吹山の植生保護のために活動する「ユウスゲと貴重植物を守り育てる会」や「伊吹山もりびとの会」、「伊吹山ネイチャーネットワーク」など多くの団体で結成される「伊吹山を守る自然再生協議会」。

平成20年に結成された協議会は伊吹山の自然を守るために、山頂お花畑を囲む全長約3キロメートル（約30ヘクタール）の植生防護柵の設置や、入山協力金制度※1の導入等に取り組んできました。

そして今年2月、協議会の活動実績が認められ、伊吹山が近畿地方で初となる日本山岳遺産※2に認定されました。

目指すはあの頃の自然の姿

しかし、これだけの努力を重ねても、植物は守りきれないのが現状です。観測史上、最深積雪の世界記録をもつほどの厳しい気象状況の伊吹山では、柵の劣化も進みやすく、さらに伊吹山に棲みつくシカやイノシシは柵を噛みちぎって柵内に押し入り、花々を根っこから食べ荒らします。

協議会では、登山オフシーズンの今年4月、猟犬を使って柵内のシカ13頭を追い出しました。また、6月には、約30日間におよぶ、日本山岳遺産認定に伴う助成事業　防護柵の金属入りネット柵への補強作業を終えました。

自然を守る確かな方法はまだわかりません。それでも、シモツケソウをはじめとする故郷の花は防護柵の中で今年も開きました。（写真下）

試行錯誤を重ねながら、これからも活動は続きます。

※1　入山協力金制度
伊吹山インフォメーションセンターやドライブウェイ山頂駐車場等に協力金箱を設置し、一人300円を募っている。伊吹山の自然保護活動のために欠かせない財源。

※2　日本山岳遺産
㈱山と渓谷社を中心に設立された日本山岳遺産基金が選定するもの。次代に受け継ぎたい豊かな自然環境を守るための活動が盛んな山が認定される。

植物が獣害の猛威に打ち勝つ日まで

厳しい気象条件の伊吹山では、防護柵による植物保全の効果を図るのも簡単なことではありません。

しかし、伊吹山に関わるみなさんの「山を守りたい」「昔の豊かな自然を取り戻したい」という熱意が実を結ぶ日まで、私もみなさんと頑張っていきたいです。

顧問
（京都大学農学研究科 准教授）
高柳（たかやなぎ） 敦（あつし）さん

■伊吹山テレビ
8月28日号
伊吹山の今　自然観察会から学ぶ
市公式YouTubeは8月31日～公開

■市公式YouTube
7月17日号
霊峰 伊吹山
～美しい山を次世代に～

■伊吹山の希少植物
市公式ウェブサイトへ